ものづくりの方舟

Ark of imagination

なかはらかぜ

1. Ark（アーク）

多くの作家においてものづくりに必要なモノは何かと問われると、返ってくるのは「感性」「感受性」「想像力」「経験値」……、もちろん作家と言ってもたくさんの種類があるわけですから、小説家なのか画家なのか、映画監督なのかプランナーなのか、実は単純にものづくりといっても多様なジャンルがあり、むしろどこまでが作家と呼ばれるのかは曖昧な部分も多いために、返ってくる回答も様々なのは当然だと思われます。

また、作家にはルーティンとも言える決まり事があって、それに合わせて自分のモチベーションを高めていくパターンもあります。仕事や作業する環境や、必要な情景、あるいは食べ物や音楽といったものまで作家によっての決まり事があり、その作家の創作意欲を沸き立たせ、集中力を高めるのです。きっと 100 人いれば 100 通りの必要なものが作家の仕事を後押ししていると言えるかもしれません。このように、ものづくりのトリガーとも言える発想の起爆剤は作家によって様々ですが、作家の発想を後押しする何かがあり、わたしたちがまったく気づかずに、実はその何かがものづくりをさせているのではないだろうか。今回、わたしなりの発想のシステムについて書いてみたいと思います。

まず初めにわたしはその何かを「Ark」（アーク）と呼ぶことにします。「Ark」で思い浮かぶのは、「契約の箱」（Ark of the Covenant）です。旧約聖書の中に描かれている、モーセが「十戒」を入れて運んだと言われている箱のことです。また、あの有名な「ノアの方舟」（Noah's Ark）も思い出されます。信仰深いノアが神の啓示を受け、巨大な方舟を完成させると、妻と、3 人の息子とそれぞれの妻、そしてすべての動物のつがいを乗せて、人間の堕落に怒った神のおこ

した洪水からその方舟で救われる物語です。わたしは大切な物を運ぶキャリアという意味も含めて「Ark」と呼びたいと思います。

2. バラの花の話

バラの花は美しい花の代表として取り上げられることがよくあります。女性が「素敵なバラ、綺麗ね！」と口にするとき、わたしたちはバラの花のどこを指して美しいと言っているのでしょうか？ 花の形、色、花束のイメージ、色々な美しさの基準がありますが、これといった法則や決まりがあるわけではありません。なぜなら、確実にバラの花が嫌いな人たちもいるわけですから、絶対的な美ではないことは確実です。ただし、絶対的な美なるものがこの世に存在すればの話ですが……。

バラの花は人間を楽しませるために咲いているわけではありません。受粉に必要な条件を満たし、より多くの昆虫たちを招き寄せるために帰結した形であるのかもしれないからです。色も人間の品種改良によって多く存在しますが、本来は昆虫の視覚に合わせた配色であることも究明されています。ではなぜ、わたしたちはバラの花を美しいと思うのでしょうか、それは美しいと判断する何かが心の中にあるからです。バラの花が美しいのではなく、心が美しいと感じているのです。つまり、美しいのはバラの花そのものではなく、そう感じる心の中の何かなのです。

言いかえれば、バラの花ではなく、カスミソウが大好きな人は、カスミソウに感じる何かがあるわけで、人それぞれにそのセンサーはあり、その何かが格納されているところは無意識の領域、あるいは深層心理と呼ばれています。そして、それを無意識から意識に上らせる役割が「Ark」なのです。

3. 美人画は本当に美人か？

江戸時代に描かれた喜多川歌麿や東洲斎写楽などの浮世絵師たちの描いた美人画が残っていますが、現代人が見て美人と思うのでしょうか？

当時の女性の顔の美人の基準としては、うりざね顔やおたふく顔のようであったと考えられますが、いわゆるデフォルメされた形象的ともとれる美人画に見えます。これが当時、タレントのブロマイドのように飛ぶように売れたと考えると不思議でもあります。中には、実際に存在した人気の花魁がモデルとなった美人画もあり、極めて人気があったようです。しかしながら、写真やムービーのない時代に、一般人は簡単にその顔を拝顔することのできない高貴な花魁ですから、その美しさを垣間見るには似顔絵しかなかったでしょう。そのときにきっと、リアルに似顔絵、つまり肖像画として描くのではなく、デフォルメされた描画を最初に試みた絵師がいたはずです。

江戸時代の美人画を見ていくと、平安時代の源氏物語の絵巻物に登場する美人画に似ていることがわかります。源氏物語に登場する空蝉という女性は、美しい人妻ですが、いわゆる源氏画と呼ばれている江戸時代の美人画の下敷きとなっていることがわかります。すでに平安時代に描かれていた絵巻物などに登場する美人の基準が、600 年あまりの時を経て江戸時代の美人の基準となっていることに驚きます。現代のように美に対しての多様性の少なかった時代に、長く時代を超えて美人が継承されてきた理由はどこにあったのでしょうか？

江戸時代の菱川師宣という絵師は、浮世絵の祖と称され、わたしたちがよく知っている浮世絵の形態を確立した人物と言われています。その美人画に源氏物語の影響があるのは間違いなく、江戸中期になると鈴木春信という浮世絵師が源氏画を描いています。これらの源氏物語から影響を受け伝承された美人画のスタイルが、デフォルメされて歌麿や写楽、北斎や広重へと、あのうりざね顔の美人画へと美の基準が昇華されていくことになります。やはり、リアルな肖像画的美しさではなく、時代を超えて絵師の心の中に伝えられてきた美の原点があり、現実の女性の美とは違った象徴的なスタイルが生まれたのかもしれません。美人画を描くときに自然とその基準が、絵師たちの「Ark」によって呼び出されていたのかもしれません。それが、多くの庶民を美人画として魅了していったのでしょう。

近代になっても、上村松園や伊東深水などに代表される日本画家の美人画においても、そのスタイルを垣間見ることができるのです。

4. 記憶の格納

ものづくりを喩えて「真っ白な心のキャンバスに絵を描いていくようなものだ」そんな言葉をよく耳にします。何もないところから形あるものを創る、という意味にもなります。もちろん旧約聖書の創世記にあるように、神が世の中を創る以前の混沌とした世界でない限り、わたしたちの周りには多くの情報があり、知覚の有無には関係なく、身体全体のセンサーはそれらを気づかないうちに取り込んでいると思われます。すべてのものをインプットしながら、必要なものだけを格納しているということでしょうか？ その際、必要でないものは忘れ去られ消去されているのでしょうか？ そこは専門家の先生にお尋ねしかければわからないところですが、大学の学生時代に誰から聞いたのかは、すっかり忘れてしまいましたが、なぜかわたしはその聞かされた話を印象深く覚えているのです。

それは、事故で頭に損傷をおった人が、脳の手術の際に医師がある部位に触った瞬間、生まれてから今までのすべての出来事を一瞬のうちに再度体験した! という驚くべき話でした。にわかに信じられるべきことではないにしても、どこかありうるかもしれない、と納得しつつ聞いていた自分がいたことを覚えています。つまり、必要な情報だけではなく、すべてが脳細胞に記憶されているということです。

もちろん、それは確証もなければ根拠もない話なので、その現象をわたしは説明することはできませんが、絵描きとしてのイマジネーションは鋭く刺激されたのでした。人間の未知なる能力への憧憬のようなものが、好奇心を刺激したのかもしれません。

しかしながら、今までに何十年と思い出したり、感じたことがなかった過去の遠い記憶が、ふとしたトリガーによって、たとえば 40 年や 50 年間一度も思い出さなかった出来事が、突如として心に蘇ってくることは、誰もが現実に体

験していると思います。つまりは、完全に記憶から消去されていたと思っていても、やはり脳細胞の中には生まれてからこれまでの記憶がすべて格納されている部位があり、「Ark」がそれらすべてと繋がっていると考えているのです。

5. 夢判断

ジークムント・フロイト（1969）は「夢判断」の中で、寝ているときに見る夢は潜在意識が生み出す願望であると解釈しています。ものづくりにも無意識下の潜在意識が関わっているとすれば、夢は「Ark」と関係があるのでしょうか？フロイトは夢は暗号化された願望だと書いていますが、直接的に夢に現れてこないのは精神的に破綻してしまう怖さがあるからです。お金持ちになりたい、憎いあいつを殺したい、彼女と結ばれたい、成績が良くなりたい、など夢の中で充足させ満足してしまうと現実の世界に戻れなくなる怖さがあります。

ハリウッド映画に「マトリックス」というシリーズ化された物語がありました。近未来、コンピューターを操る AI が自我に目覚め、世界を支配しており、その世界では人間が畑のようなところでカプセルに入れられて、体内から発電される体内電力を集めるために栽培されている状態になっています。その人間の微量な電力を集め、AI たちは自らのエネルギーとしてシステムを動かしている。そんな設定でした。何億という人間たちがカプセルの中で眠らされて電力を取り出すためのコードで繋がれています。その眠っている何億という人間たちに一様に同じ夢を AI は見せているのです。人間たちはカプセルの中で眠らされているという現実をまったく知らずに、AI たちが創った偽物の（バーチャルな）建物のそびえる街や自然の豊かな世界に暮らしていると信じきっているのです。つまり、我々が暮らしている社会は AI によって、すべて「夢」の中に創られた偽物であり、わたしたちはそれを現実と思って生活しています。この世の中は、本当にどこまでが現実で、仮想なのか、実際に人間の脳の中の働きが、微弱な電気信号であり、思考や感情、記憶を司る回路があるのだと理解すれば、人間は確かに生体コンピューターと言えるわけで、「マトリックス」の世界は、急に現実味を帯びてくることになります。

フロイトはそのような現実と夢との違いを混乱させないように、直接的に願望を夢として見せるのではなく、あえて暗号化して見せていると言っているのです。その暗号化が、圧縮、移動、象徴化、そして視覚化と進み最後に物語として置き換えられる、というのです。抑圧されている願望や欲望がカタチを変えて夢の中で表出するというのです。その夢を創り出す素材が深層心理に格納されているのであれば、やはり夢を見るプロセスに「Ark」が関わっているのではないのかと考えています。

6. 子どもの頃の夢

子どもの頃に母親の自転車の後ろに乗っていて、川に差し掛かると、渡りやすい大きな橋がすぐ横に掛かっているのにも関わらず、丸太でできた一本橋を母親は強引に渡ろうとします。わたしは落ちるんじゃないかなぁ、と危惧していると案の定、母親と自転車と一緒に川に転落してしまいます。実はその夢を何度も見たものです。そして必ず落ちるところまでは見るのですが、川に落ちる前に目が覚めます。夢はそのほとんどが目が覚めた一瞬は鮮やかに覚えているのですが、急速に色褪せていくように記憶から薄れていくものです。しかし、この夢については今でもはっきり覚えているのです。50 年も前の夢ですが、実はその原因となる幼い頃の出来事が今も記憶の中に残っているのです。

ある日、母親は自転車の後ろの荷台にわたしを乗せて商店街にやって来ました。そして、わたしを乗せたままにして、自転車のスタンドを立てて、ひとりで商店へ買い物をするために入って行ったのです。状況としては、商店の前の道にひとり自転車に乗せられたまま、待たされているわけです。自転車の立ててある道は商店へ向かって少し斜めになっており、自転車そのものも少し傾いだ状態だと思ってください。かなり危険なカタチと言えるでしょう。まさに少しでも子どものわたしが後ろの荷台でバランスを崩してしまったら、自転車もろとも転倒してもおかしくない危うい状態なのです。たぶん待たされていた時間はほんのわずかだったのでしょう。しかしながら、不安定な荷台に座らせられているわたしにとって、いつ転倒するかわからない状況、しかも幼児にとっ

てはかなり高く感じられた荷台、これは立派な恐怖体験の刷り込みです。つまり転倒して「怪我をする」という恐怖が、夢の中では川へ落ちて「怪我をする」へと圧縮されているのです。そして「転倒」するというアクションが「落ちる」アクションへと移動されて、川にかかる一本橋という不安定で危険な要素へと象徴化され、夢の中ではその橋を渡るという視覚化が行われたと考えます。夢の中ではなぜ母親が大きな普通の橋ではなく、その隣にかかっている 1 本の丸太でできた橋へとチャレンジして、予想通り転落するのでしょうか？ 夢の中ではわたしはそれを疑問に思い、それを証拠に必死になぜ危ないこの橋の方を渡るの？ と、母親に問いかけているのです。絶対に落ちるからやめて！と言っている自分が夢の中にいます。自分を主人公にして、映像的には自分と自転車を運転している母親を入れ込んだカメラ映像になっているのです。川へと転落していくシーンは、わたしの主観ではなく映画のように全体を映した映像となっているのです。つまり、自転車ともども川へと転落していく親子を、もうひとりの自分が見ているのです。まさにこれが物語化されている理由です。夢の中には当事者である自分と、それを客観的に見ている自分がいるのです。圧縮、移動、象徴化、視覚化、そして物語化へと処理されていくのは、夢の中ではありますが、フロイトに言わせると無意識のうちに潜在意識が創りだしているビジョンだと言えるのだそうです。実はもっと怖い体験や記憶をも「Ark」はあつかえるのかもしれませんが、日頃は精神活動を乱してはいけないので、自我の領域がそれをブロックしているのでしょう。

7.「禁断の惑星」に見る心理

先ほどのお話の、バラの花を美しいと感じる心、についてですが、生まれたときにはバラの花さえ知らないはずです。では、いつの時期にバラの花を美しいと思うようにインプットされたのでしょうか？ わたしが川へ転落する夢とは違って、その理由や時期については判然としない場合が多いですね。しかし、これも格納されているのは潜在意識ということになるわけですから、いつ「Ark」が無意識の領域から、バラの花は美しい、と表出させたのでしょうか？

自我ではたどり着くことのできない見えない自分、その潜在意識とは何でしょうか？ フロイトだけではなく多くの学者によって研究がなされていますが、わたしがそれを的確に説明してあると感じた映画を紹介します。もちろん、これから解説するのは研究論文でも証明された事例ではありません。ごく普通のエンターテイメントとしての SF 映画です。

「禁断の惑星」（Forbidden Planet）は、1956 年にアメリカの映画会社 MGM が製作した作品です。監督はフレッド・M・ウィルコックス、出演者はウォルター・ビジョン、アン・フランシス、レスリー・ニールセンなどです。中でも、ロビーという名前のロボットが有名となりオモチャとして日本でも販売され、現在でも SF ロボットの元祖的な存在として SF ファンには親しまれています。この禁断の惑星こそ、物語のキーワードなっているのが潜在意識なのです。

ある星に宇宙移民として訪れた人たちが科学者の家族 3 人を残して死んでしまいます。残ったその家族を連れ帰るために宇宙船が地球から派遣されます。しかし、すでに母親も亡くなっており、父親と美しい娘だけが、なに不自由なく科学者である父親が築きあげた素晴らしい環境で暮らしていたのです。この星を心から気に入っている父親は地球に帰ることを拒否するのです。派遣されてきた船長たちは、一緒に地球に帰ることを強く主張します。頑なに反対する父親とは、娘の気持ちは違っていました。自分たち親子以外のたくさんの地球人とふれあい、地球への好奇心で娘の心が揺れます。そんなとき、宇宙船の乗組員たちをやがて目に見えない何かが襲い始めるのです。犠牲者も出たことから主人公の船長は、父親に事情を聞き始めます。父親は科学者で数億年前にかつてこの星に存在していたと思われる知的な先住星人たちのことについて研究をしていました。その結果、先住星人たちの開発した科学やエネルギーを得て、科学者の父親は先住星人とおなじ超人的な知能と能力を得ていたのでした。調べてみると、その先住星人たちの究極の目的は、頭で考えるだけで、つまり心の中で思い浮かべるだけで、何でも物を創り出すことができる研究開発でした。まさに肉体を持たない意識だけの生命体への進化でした。そのとき、宇宙船が再び見えない怪物に襲われ、乗組員たちはさらに危険にさらされる事態となり

ます。やがて、船長たちは父親の科学者も気づかなかった重要な秘密を突きとめます。数億年前に存在し、一瞬にして絶滅してしまった先住星人も気づかなかったことがありました。潜在意識を利用して意識だけでものを創り出せる能力は、脳の自我の部分を驚異的に増幅し高めることで実現するのですが、そのときに潜在意識の中のイドと呼ばれる領域まで高めてしまったのでした。そのイドにある憎しみや悲しみ、凶暴性までを増幅してしまい、先住星人たちは自分たちは意識しないまま、潜在意識の中の凶暴性によって創り出された、目に見えないイドの怪物によって殺し合い、あっという間に絶滅したのでした。同じように科学者の父親も脳の能力を増幅してしまったため、潜在意識の暗黒面が増幅され、イドの怪物を創り出してしまったのです。そしてそれはやがて、自分を置いて船長たちと地球に帰ろうとする娘への、裏切りに対しての憎しみとなり、無意識のうちにイドの怪物を創り出し、宇宙船や船長たち、ましてや最愛の娘までを殺そうとし始めるのです。もちろん、イドは無意識下の領域なので父親である科学者には、みんなを殺そうとする意識はありません。しかし父親自身にもわからない、コントロールできない無意識の中の暗黒面が創り出している怪物なのですから、実体を持たないため防ぐことができないのです。やがて……。

これがあらすじです。結末は書きませんが、興味深いストーリーです。1956 年に製作されたことを考えると、すでに精神分析の世界を組み込み、フロイトやユングの無意識概念を利用しているところが、単に子ども騙しのような SF 物語ではなく、重厚な人間の執着や心の闇をあつかった素晴らしい作品だと思います。現にこれ以降の宇宙を舞台にした物語や、ロボットを主人公にした物語にも、宇宙物理学や精神分析学、脳科学などを参考にしたと思われる物語が多くつくられることになるのです。

「Ark」は暗黒面にもこのように働きかけるかもしれません。しかしわたしはイドのように制御が効かない無意識の領域を「Ark」が繋げたとしても、意識下の自我が制御できると思っています。

8. 降臨とは

精神分析学における深層心理は確かにどこかで、ものづくりの根幹につながっているのは間違いないようです。なぜならば、無意識のうちに頭に浮かんだ漠然としたアイデアは、常に頭をフル回転させ、アイデアを無理やりに抽出させようとしているときには、得てしてまったく浮かばず、何げなく別のことに注意を向けているときに、あるいは限りなく大脳を休息させリラックスさせているときに、それは入浴中や睡眠中をも含めてですが、そのようなときにひらめくことがままあるからです。最近では「神が降りてきた、何かが降りてきた」のように表現されることが多いですが、降りてきたのではなく、深層心理の中に無意識のうちに格納されていたものが顕現したものと言えます。降臨したと喩えられることもあり、見えないものが姿を現すことに威厳や神秘性、あるいは超人的なイメージを加味した表現と言えるかもしれません。ただ、夢判断と同じく、まったく何もない混沌とした 0 ベースからは何も生まれるはずはなく、やはりリラックスしているときであれ、格納されている源泉を「Ark」がどう引き出すかが、ものづくりのプロセスであることには、間違いありません。

9. スピリチュアル的心理

今から 15 年前にブームになったのが「オーラ」という言葉です。あるテレビ番組がきっかけでしたが、同時に「スピリチュアル」という言葉も流行しました。とくに幅広い年代の女性たちに圧倒的なブームとなりました。今でもスピリチュアルに関する書籍は書店に並び、女性たちに人気があるようです。このスピリチュアルもまた、深層心理に近い自分の内なる力のように持てはやされ、誰もが抱える多種多様の悩みや苦しみを癒すツールのひとつとなっています。

ヨーガ、レイキ、チャクラ、マインドフルネス、ソウルメイト、透視、守護霊、天使、宇宙人などなど、超自然的なものですが一部の能力のある人たちによって教室などが開催されています。

精神面を考えるひとつの手段としては、ある意味実態を持たない精神修行的なところがあるスピリチュアルですが、精神分析学と違って肉体そのものにも

パワーが宿るという発想があり、ヨーガのように肉体的な均衡を重視し、体調や病気も精神と共に克服できるというのが特徴のひとつでもあるようです。そこにある種の占いのように、タロットカードやオラクルカード、石を使ったストーンパワーやクリスタル、アロマオイルを使っての精神への働きかけもあり、占いに似ているところから未来の予知が加わってくることも多く、啓示的な要素もあるように思われます。

相談にくる人たちも、肉体的な疾患と違って潜在的な精神の病の人たちが多いだけに、深層心理に個々のケースにふさわしいスピリチュアルな手法で働きかけることによって治療するのです。

ものづくりの源泉として関わりのある「Ark」が、直接スピリチュアルな世界と関わっているのかはわかりません。わたしにはスピリチュアルな能力がないからです。しかし、もし創造的な作品をつくり続けることができる手法のひとつとしてスピリチュアルがあるとすれば、発想が超自然現象と関わっている可能性を否定するつもりはありません。

10. アニマル的心理

アニマルコミュニケーションという動物の気持ちを伝えるスピリチュアルがあります。それを行う人をアニマルコミュニケーターと呼んでいます。一緒に暮らしているペットたちだけではなく、死んだペットの気持ちも写真から伝えてくれるというものです。誰もがペットには想いが強くあり、犬や猫たちが本当に幸せなのか、何か不満はないのか、を知りたいと思っています。言葉を話さない動物たちだからこそ、わたしたちは尊い生き物として想いを寄せることができます。だからこそアニマルコミュニケーションのできる人にお金を払ってまで、ペットたちの気持ちを聞きたいと思うのは当然だとも言えるでしょう。しかし、実は動物行動学を学べばある程度、生き物としての特性から気持ちを把握することは可能です。その上で、日頃から共に身近でペットたちの生活を見ていると、動物たちが何を欲しているか、何を嫌がっているのか、健康状態が良いか悪いなど、ある程度わかるはずです。それで充分わたしたちはペット

たちとコミュニケーションがとれるのです。それは潜在意識の中に、同じ生き物としての何かの信号があり、それをわたしたちが感じるアンテナを持っているからだと考えます。つまり、人間も進化の帰結として種の違う動物たちともコミュニケーションがとれる、潜在的な能力をもともと有しているということに他なりません。「Ark」がそれを引き出しているとすれば、けっして特別な能力ではないのです。

たとえば、動物行動学を熟知したアニマルトレーナーや、動物園の飼育担当者も動物たちと心を一体化できることを、わたしたちはよく知っています。動物たちとのコンタクトは、やはりスピリチュアルなものだけではなく「Ark」の守備範囲の部分もあるようです。

11. カトリック的心理

一般的に宗教の考え方の中には宗派は問わず、無意識の領域は存在します。キリスト教でスピリチュアルといえば、神からの霊性に関わることで聖霊について使われる言葉でもあります。聖霊が働きかけることをスピリチュアルと呼び、働きかける心の領域をまさに深層心理、無意識の場所としているのです。超越者としての神がいて、その言葉を聞こうとわたしたちは祈ります。実体を持たない神が、スポークスマンとして受肉され遣わされたのがキリストです。神は超越者ですが、主イエスはわたしたちの同伴者と言われる所以です。わたしたちと同じ人として、民衆に言葉を使って語られたり、慰めたり、わたしたちに寄り添いながら旅をされました。やがて、十字架に架けられて処刑され、のちに復活され弟子や多くの信者の心の中に、福音として蘇ったことが伝えられています。みなさんがよくご存知の新約聖書です。しかし、直接、神の言葉やイエスの計らいを聞くのは耳からではなく、聖霊による心の領域になのです。聖霊による深層心理の領域への働きかけが信仰であると言えます。よってローマカトリックでは、この神とイエスと聖霊のことを、三位一体（父と子と聖霊）と呼んでいます。どれが欠けても信仰宣言は成り立ちません。

つまり、神の働きかけ、イエスの言葉が聖霊によって届けられるところが無意識の場所、深層心理と言えるのです。そして「Ark」は極言すれば、聖霊に近い働きを持っているかもしれません。バラの花が美しいのは、バラの花ではなく、あなたの心が美しいのだ、という解釈は、カトリックでは聖霊の働きに似ているからです。

わたしたちが人生の中で、何か重要な場面で、人生や生活に関わる別れ道や決断のときに、今考えると、なぜかある方向へと呼ばれた感覚があったり、導かれたりした感覚があったとすれば、それは神の働きかけであると言えます。また、何かに背中を押された感覚があれば、やはり聖霊による無意識の領域への働きかけだと思うのです。カトリックではもっと強い働きかけの力を「召命」、あるいは「照らし」ということがあります。神父やシスターなどの修道者が経験する働きかけです。

12. 無意識へのインプット

少し、話を戻しましょう。バラの花が美しいのは、バラが美しいのではなく、それを美しいと感じる心が備わっているからであるとお話ししました。では、心のどこでわたしたちは美しいと感じているのか？ 判断しているのか？ やはりそこが重要になってきます。バラの花は美しい、と誰かに教わったのでしょうか？ あるいは、何かの本や図鑑で見たのでしょうか？ 歌の歌詞にあったのでしょうか？ 「バラの花＝美しい」という図式はいつ、どこで備わったものなのでしょうか？ きっと、はっきりとした記憶はなく、根拠も見つからないかもしれません。映画の話の中で取り上げた深層心理の領域である「イド」ですが、何ものにも制約されない純粋なる本能的衝動であると言われています。フロイト（1970：530-531）は「精神分析入門」の中で、イドは「本能的な衝動の貯蔵庫」だと言っています。イドは生まれたばかりの新生児に喩えられることが多いのも、それが理由かもしれません。完全なる無意識の世界で空間も時間的制約もなく、一次元的な構造のようにも思えます。やがて社会と触れることで

無意識の領域へ流れ込む多くの情報によって自我が形成されます。つまり「自分」という存在が芽生えてくると言えるでしょう。

わたしはその最初の種を蒔くのは母親でないかと思っています。母親のふところから離れて自我による物心がつく頃には、イドは自我による管理下に入り、脳は大きく成長してゆき自我に支配された人間となります。もしこのイドから自我への移行時期に母親が「バラの花は美しい」と言えば、無意識の領域にプリントされている可能性はあるでしょう。いわゆる潜在意識として記憶されているのです。そして、自我がしっかり確立されて人間としての精神構造が構築された後に、「バラの花」と聞いただけで、深層心理に格納された無意識の言葉と結びつき、自我として表出し、疑うことなく「美しい」と自ら連想変換をして「バラの花は美しい」と認識することになるのではないでしょうか。

自我による人間としての成長過程から、自ら考えて行動する顕在意識に支配された生活になってからも、実は潜在意識の領域にある無意識がわたしたちの生活に大きな影響を与え続けていると言えます。なぜならば、わたしたちが意識している領域はわずか 10%、残り無意識の領域は深層心理部分のイドや潜在意識からなる 90%もの領域を持っているからです。

わたしは何かをつくり出す領域としての、想像力や感性という自我に直接結びついている領域を、無意識の中に独立させて「Ark」と呼びたいのです。

このように深層心理や潜在意識のように無意識の領域を考察してくると、真っ白なキャンバスに突然に何かが浮かぶ現象は、つまり「発想」するという行為は、やはり自分の中の無意識エリアに格納された自我やイドの中から、「Ark」がもっとも適切な素材を選んでいるのだと考えたくなるのです。

13. デジャヴ

デジャヴというと初めて見る状況や情景なのに、以前見たことのあるような記憶として感じることです。既視感とも言われ誰にでもある現象です。先出したフロイトは夢の中で見たことが起因しており、多くの夢は忘れてしまうため実際に見たと錯覚をしてしまい、既視感をともなうのだとしています。確かに、

見たことがある、経験したことがある、その感覚はあるものの、時や場所を特定できないのも既視感の特徴と言えます。

わたしは作画作業の中でも風景画を描くのが一番好きなのですが、もちろん実際にある風景をスケッチすることもあります。しかしながら、ほとんどの風景イラストにおいては、実際には存在しない風景です。不思議なことに宇宙の架空の星の風景を描くのではない限り、わたしが描く風景画には、見慣れた山や川、家などが登場して、風が吹き雲が流れ、情景によっては雨や雪も降っています。すべての要素や道具立てがわたしたちの身の回りにある風景と同じものであるのにも関わらず、一枚の出来上がった風景画はどこにも存在しない風景なのです。その風景画や風景イラストを見られた方がよく言われる感想が、「どこかで見たような風景だなぁ」です。いつか、どこかで、見た風景に似ている……、まさにデジャヴです。わたしが想像で描いた風景なので、どこにもない架空の風景です。ありそうで実は現実にはない風景が、なぜみなさんの心にとまるのでしょうか？

それはみなさんの心の中にある、バラの花と同じく無意識の中の風景に語りかけているからです。みなさんの潜在意識の中の、いつかどこかで見た風景に共鳴して、デジャヴ的ななつかしさを蘇らせているのではないでしょうか？

14. 風景画

わたしは漫画家ですが、キャラクターを描くよりも背景の風景を描くことが好きです。おかしな漫画家と思われるかもしれませんが、本来、油絵の画家になりたくて大阪芸術大学に入学して、芸術学部の油絵専攻で 4 年間風景画を勉強してきました。子どもの頃から絵を描くことも、落書きのようにノートに漫画を描くことも大好きでしたが、自分の進路に画家の選択肢はまったくありませんでした。高校時代に美術部に属していましたが、その当時の美術の教諭が本当に風景画の上手な画家でもあり、美術室や図書室に掲げてある先生の絵を見る度に、ため息が出るほどの憧憬でもって眺めていました。画家に憧れるというよりも、むしろその先生のように絵を描きたい、それが目標であったよう

です。心を揺さぶられるような絵画に出会うと、まずは一度真似て描いてみたくなる性格で、ただし模写と言えるレベルにはほど遠いものでしたが、どうすれば描けるのかが知りたくて、頑張って真似て描いていました。もちろん、とくにその先生の描かれる素晴らしい水彩画は次元が違っていて、どのように頑張っても少しも同じようには描けませんでした。小学校から馴染んできた水彩画です。子どもでも手軽にあつかえる画材です。それなのになぜ同じように描けないのか、どこが違うのか！すら当時のわたしには理解できていませんでした。

15. 絵ごころ

そんなある日、高校 1 年生の頃にあるテレビ番組に釘付けになりました。イタリアのテレビ局が制作し、NHK で放送された「ダ・ヴィンチ ミステリアスな生涯」、当時は「レオナルド・ダ・ヴィンチの生涯」というタイトルで放送されました。大学を卒業して数年たった頃に再放送があり、その頃には家庭用ビデオレコーダーが普及していたので録画ができました。今は DVD 化され発売もされています。しかし、高校時代にはそのようなものはありません。270 分にも及ぶ長編番組だったので数話に分かれていて、3 夜連続で放送されたように記憶しています。それを食い入るように一場面も見逃さないようにと集中して見たことを覚えています。多感であり絵を描くことの大好きな高校生は、感動と共に大きなショックを受けました。そのショックは何かといえば、今まで自分でも気づかなかった驚くべき仕事が存在するということでした。そう画家という職業です。「レオナルド・ダ・ヴィンチの生涯」を見て初めて画家という職業に憧れを抱いたのです。そのドラマの原作本ともいえる厚い本が、何と人口 24,000 人たらずの小さな街の書店に 1 冊置いてあったのです。まさに運命です！その書店は小学校の頃から、鉄腕アトムという漫画本などを買いに寄っていた馴染みの書店でした。

同じ頃、民放テレビでは「棟方志功物語おかしな夫婦」が放送されたのです。棟方志功の版画は世界的に有名だったので、美術室の画集で見たことはありま

したが、本人の人となりは知らなかったのです。その生涯にまた感動してしまい、書店に寄ってみると棟方志功伝とも言える、そのドラマの原作本「板極道」が置いてあったのです。こうなると奇跡です！

残念ながら「棟方志功物語おかしな夫婦」は DVD 等にはなっていませんが、高校時代のこの 2 つのテレビドラマと 2 冊の原作本が画家への憧れを決定的なものにしました。

高校 2 年生のときに油絵の道具を揃えて、ダ・ヴィンチの「モナリザ」を模写しました。また、大きな障子紙を買ってきて墨汁で棟方志功の描く菩薩の絵を真似てみたりもしました。もちろん似たように描けても、そこから当時のわたしは何も発見はできませんでした。モナリザも菩薩像もモチーフとして魅力的ではありますが、やはりその頃から人物より風景を描くことが好きなことに、自分自身も気がつき始めていました。休みの日に親と一緒に県内の風景の良い場所へ、油絵の道具を持って絵を描きに行くことが、むしろ勉強になりました。そうです、美術の先生のような水彩画や油絵の風景画を描いてみたかったのです。また、面白いことに漫画本を読んでいると、その漫画の中の物語もキャラクターも魅力はありますが、記憶に残っているのは、不思議とその漫画の背景に描かれている風景であったり、部屋の中の様子であったりと、その作品の世界観を決定づけている背景部分の風景だったのです。意外に思われるかもしれませんが、ギャグ漫画のブームを作った有名な漫画家・赤塚不二夫の描くギャグ漫画の背景にも、素晴らしい庶民の生活を感じさせる、あたたかい風景のコマがちりばめられていたのです。

16. 絵を学ぶ

大阪芸術大学で油絵を学んでいるときも、半具象というジャンルの先生のゼミに入っていました。半具象とは風景そのものを忠実に表現したり、人物の肖像画を描いたりする具象とは違い、抽象的な（今はファンタジーと呼称されますが）イメージを少し加えた作品を目指します。曖昧な感じですが、自由度の高い作品づくりができるのです。前期と後期でそれぞれ 100 号以上の大きさの

作品 2 枚程度をキャンバスに描くのが課題なので、ひたすら 3〜4 年のゼミでは風景を描いていました。京都や奈良や和歌山、兵庫から足を伸ばして山陰側の港町などにもスケッチ旅行に行きました。もちろん移動はキャンバスをさげての電車や列車移動なのですが、自動車を運転しながらではゆっくり眺めることのできない風景を、車窓から堪能できるのも列車ならではの楽しみでした。どんどん現れては消えていく限りない風景の横スクロールは、車窓が映画のスクリーンのようで、わくわくして眺めていたのを覚えています。また、大学の教室やアトリエにある窓も額縁のように風景を切り取ってくれるので、一幅の名画のように新鮮な風景に見えました。中でも実家のトイレの窓からの風景が美しく、お行儀が悪いですが、おしっこをしながら窓から見えるその風景がいちばん好きでした。手前の南天の木越しに、畑と田んぼが広がり、その向こうの林の中には母校の高校の校舎が白く輝き、その後に松林が校舎を抱くように広がり、それよりもっと遠い山までが、トイレの窓の額縁から広がっていました。トイレの窓は小さいサイズのものが多いので、6 号程度の大きさのキャンバスに似て、コンパクトに額縁に見立てることができたのかもしれません。

17. 新幹線の車窓

わたしと風景との関わりは、このようにして時や場所やモチーフに関わらず、いろいろな場所に転がっていたようです。一般の人たちにはまったく関心のない風景かもしれませんが、たとえばこんなことがありました。大学のある関西から帰郷するときに、当時父親が国鉄職員（現在の JR）だったので、安い運賃で帰ることができました。そこで、きまって新大阪から小郡（今の新山口）まで新幹線を利用しておりました。3 時間程度の新幹線での移動ですが、この新大阪からの山陽新幹線はやたらとトンネルが多く、ほとんど暗闇で風景は時々しか見ることができません。トンネルに入り、出た瞬間数秒でまたトンネル、という場所も珍しくなく、何度も何度もトンネル-風景-トンネル-風景-トンネルと続いていきます。ところが、一瞬、トンネルとトンネルの間で目に飛び込んでくるカットバックのような風景がなぜか頭に残っていて、何かのきっかけで

その風景が後日蘇ってくるのです。その風景が見えているのはわずか数秒、覚えるつもりでもなく、目をこらしていたわけでもなく、ぼーと見ていたような車窓の風景ですが、その瞬間どこかに格納されていたようなのです。無意識領域に自動的に格納されていたと言えるでしょう。

手前に棚田が広がり、田んぼの中を抜ける細い道が、小さな分校のような学校の校門まで続いており、右には商店のような建物があり、その店の前には郵便ポストがあって、2、3 人の子どもたちの姿もありました。その学校は小学校に違いありません。田んぼの中には蓮華草が咲いていて、青色のトラクターも動いていたのを覚えています。そして、小学校の裏は森になっていて、木々の間から神社のような屋根がちらりと見えていて、この集落を守っている氏神さまなのかもしれません。その森をまわるようにして小さなマイクロバスが現れて、確かにスクールバスのマークがついていたように見えました。次の瞬間、再びトンネルに新幹線が轟音と共に入ってしまい、車窓は自分の顔を鏡のように映す闇へと変わってしまうのです。それは何度も言うようですが記憶しようとして全集中しているわけではなく、ぼーと眺めていて目に焼き付いている風景なのです。わたしは努力しても数学の公式や英単語が簡単に覚えられるほど記憶は良くありません。むしろ、子どもの頃から物覚えが悪く、いまだに何度か会っている人に「初めまして」と挨拶して笑われることは日常茶飯事です。そんなわたしですが、なぜか風景や情景については写真で撮影したようにどこかに覚えているのです。その領域をコントロールしているのがやはり「Ark」なのです。

18. 風景を描く

つまり、わたしの描く風景は、そのようにして過去から現在までの、無意識のうちに格納されていた、膨大な風景データを白い画用紙の上にレイアウトしているのです。その状態が風景画を描いているプロセスであると言えるのです。つまりは、まったく何もないところから、0 からの創作ではなく、深層心理にある貯金してあった風景を「Ark」がアップロードしている状態が、絵を創作し

ている状態だと考えています。並べたデータを具体的に目に見える風景画としていくには、次に技術がともないます。これはスポーツと一緒でどれだけ正確にアップロードしたイメージを、描写して、着色するかなので、わたしの中の使う引き出しが違うと思ってください。作画作業は技術です。自ら研究をして、実践をして覚えてきたテクニックです。つまり自我による経験値の積み重ねによって勝ち取ったものです。無意識に覚えていたものではありません。10%の自我によって試行錯誤の結果、手に入れたノウハウなのです。そうすることで出来上がった風景画は、このときの作品のテーマやコンセプトによって、わたしの深層心理の中の断片的なパーツをつなぎ合わせてレイアウトされているので、どこにでもありそうだけれども実際には存在しない「らしい」風景として描き上げられ、それを見て頂いたみなさんからは「日本の原風景だね」という感想を頂戴することになるのです。

19.「Ark」へのアプローチ

わたしたちの心の中には、自我として意識している領域と、それよりはるかに多くの容量を有している無意識の領域があることをお話ししてきました。心理学や精神分析学の世界では常識でしょうが、わたしたちが普段の生活の中でそれを意識していることはあまりありません。しかし、商店街を歩いているときに、ふと花屋さんの前に並んだたくさんのバラの花を見かけたときに、鮮やかな美しさに目を奪われてしまいます。列車に乗っているとき、ドアから乗り込んできた女性に、やはり見とれてしまうことがあります。その女性が絶世の美女ではなくてもです。また、自分の好きなアイドルの写真を持ち歩いたこともあるかもしれません。そのアイドルは友だちの好きなアイドルとは違っていて、言い争いになります。

朝起きたときに、なぜか哀しくて涙が出ていたり、心がジーンとして幸せな気持ちに包まれていたり、もちろん恐怖でどきどきして目覚めたこともあります。はっきりとした物語や状況はほとんど忘れているにも関わらず、目覚めた

ときの感情だけが胸に残っているのです。夢が現実へと侵食されていくプロセスです。

会社の指示でお得意先へ出向いたときに、初めて来た町であるのにも関わらず、なつかしく昔見たことのある町並みのようであったり、どこかで見かけた人の顔であったり、道を尋ねたおじさんに、同じような会話をこの人と以前したことがあるような不思議な記憶を感じたりと、そのような錯覚を体験するかもしれません。

仕事で企画会議をしているときに、ちょっとした誰かの言葉にまさにひらめきがあり、今まで行き詰まっていた流れを打ち砕くようなアイデアが降りてくることがあります。仮にそれが企画として採用されなくても、自分なりの充足感や達成感を感じるときです。

眠れない夜にふと、今まで自分の歩いてきた人生を顧みたときに、何となくあの人生の曲がり角や転機に、誰かに背中を押された感覚や、進むべき道を示唆された不思議な働きを感じることがあります。どうしてあのとき、この選択肢を選んだのだろうと。あの苦しい時期を乗り越えられたのはなぜだったのだろうと。

言葉も通じない、言葉すら持たないと思っていたペットたちと接しているとき、動物たちからのメッセージを感じたり、要求を理解できたりする瞬間があります。溺愛するばかりに勝手に飼い主が都合良く感じているそれではなく、確かに動物たちの目から伝わってくる確かな感情があります。

わたしはものづくりの作家として、時々、描いているのか、描かされているのか、どちらかわからなくなるときがあります。深夜に作品をつくっていると、そんな自力なのか他力なのかもわからない緊張感に襲われます。神が降りてきたとよく言われる瞬間です。実際には何も降りてきてはいないでしょう。しかし自分でない何かが描かせているとすれば、それはどこにいるのだろうと想像を巡らせてしまいます。いつもそのような降臨感覚があるわけではありません。そうです、こちらが思うように都合良くは降りてきません。

これまで書いてきたように、それらの感覚が格納されているのは、無意識の世界であり、混沌とした光あれと神が言われる前の世界のような場所かもしれません。うかがい知ることのできない領域であり、何が隠されているかもわたしたちには、まったくわからない困った場所ではあります。

そこにはしかし、わずかに意識下にある自我の世界だけでは、けっして説明できないような、わたしという人間を存在させているところであり、あるいは、人格や行動、執着や衝動のようなメンタルな部分も含めて、発想やひらめきさえも蓄積されていて、また、それらに子どもの頃からの膨大な記憶が絡み合って格納されているように思われて仕方がないのです。それらは寝て見る夢の源泉にもなっています。

これらのすべてが、個々の無意識の領域に、生まれたときから蓄積され続けていて、見事に図書館の書棚のようにジャンル分けされているのではないでしょうか。

流行りのスピリチュアル的な世界観で言えば、前世からのデータもどこかに格納されているかもしれません。また、宗教的には神や仏が語りかける場所、つまり聖霊が働く場所であるとも言えるでしょう。そして、注意が必要なのはイドとも繋がっているとすれば闇の部分、悪の心も内包しています。映画「禁断の惑星」のようにイドの怪物を生み出すことはないでしょうが、怒りや恨み、嫉妬や妬み、そんな闇の部分も理解しておかなければならないのです。どんなに真面目で善人であっても、心の闇は必ずあります。

では、どうすればそれらが降りてきてくれるのでしょうか？ 自分ではその無意識の領域の中を見ることも、サーチすることもできません。ある種の催眠療法などで呼び出す試みもされているようです。

20. ものをつくること

このように、何とかくも多くの事例のうちに深層心理が潜んでいることでしょうか。まさに自分でも意識しない、90%の隠れている自分が、その自分の身体や精神、生活にまで影響を与えていることは不思議でなりません。その深淵

を、わたしたちは垣間見ることもできないのに、それがわたしたちを密かにコントロールしているのです。

人間がもし無意識の領域をすべて自我として認識できるとすれば、きっと膨大な記憶のデータ量と整理できない感情の流れ込みによって、精神そのものが破壊されてしまうかもしれません。コンピューターに喩えてみてもデスクトップにすべてのデータやファイルが散乱していると整理できず混乱するのと同じですね。ハードディスクに格納して、必要なときにそれを引き出しながら使っていく方が効率的ではあります。そして、必要なデータを探すときに、無意識のうちに検索作業をしてくれているのが「Ark」なのです。

仕事で「海を見下ろす風景画」のオーダーを頂いたとします。海、高台、で検索すると、連鎖的に棚田、半島、灯台、船、カモメ……、と複数の関連した映像を、わたしの無意識の領域や潜在意識の奥深いところから「Ark」が引き出してきてくれます。そこに人物の絵が必要であれば、その作品を見る人たちのタイプによって取り出す引き出しが変わってきます。公共の刊行物なら 3 世代の家族、農業関連の冊子であれば農家の人々や家族、学校のお知らせ版であれば子どもたちや先生、保護者のみなさん、といった検索がされて、先ほどの風景画の中にレイアウトされることになります。

後は、それらをうまく組み合わせ、見栄えの良い絵やイラストにしていく作業ですが、このプロセスは説明したように絵描き職人としての引き出しですので、どれだけ多くの絵を描いてテクニックと経験を積んでいるか、絵を描く技術を学んできたか、素晴らしい他の作家の描いた作品を見てきたか、という自分の腕に頼るしかありません。素晴らしい発想とセンスがあっても、それを具現化して作品にできるテクニックがなければ作家とは言えないでしょう。また、天才的なテクニックを身につけたとしても、発想やイメージの構築に必要なデータ量のない、あるいはデータがあっても引き出すための検索エンジンをもたなければ、宝の持ち腐れとなるでしょう。

「Ark」が自分ではうかがい知れない膨大な無意識の領域に蓄積されたデータの中から、実に適切なイメージや素材を目の前に広げてくれるので、作家は白

いキャンバスの上に作品をつくることができるのです。「Ark」は極めてものづくりの作家には重要な発想のナビゲーターでもあるのです。また、ものづくりだけに必要なのではなく、やはり人生の道しるべとして重要な心の領域だと、わたしは考えているのです。

頂いた仕事に合わせて効率よく「Ark」が使えるには、少し訓練や経験が必要かもしれませんが、それ故に、突然「Ark」から発想すると嬉しくて、浮かんだことを口走ったり、予期しない行動に出たりすることも作家にはよくあり、その奇異な言葉やアクションが作家特有のものであることから、世間的には変わり者と見られるところも否めません。その独特な作家のスタイルや世界観は、クリエイターたちの無意識の領域と「Ark」から生み出されているものだと理解してほしいのです。

【参考資料】

・共同訳聖書実行委員会訳(1995)『聖書・新共同訳・旧約聖書詩篇つき』日本聖書協会.
・ジークムント・フロイト著, 高橋義孝訳(1969)『夢判断』上下巻, 新潮社.
・ジークムント フロイト著, 安田徳太郎訳(1970)『精神分析入門』角川書店.
・小林俊一/山田洋次(1971～1972)『棟方志功物語おかしな夫婦』CX 制作.
・フレッド・M・ウィルコックス/シリル・ヒューム(1956)『禁断の惑星』[DVD]MGM 製作.
・ラリー&アンディ・ウォシャウスキー/ラリー&アンディ・ウォシャウスキー(1999) 『マトリックス』[DVD]WARNER BROS.製作.
・レナート・カステラーニ/レナート・カステラーニ(1972)『ダ・ヴィンチ ミステリアスな生涯』[DVD]イタリア放送協会制作.